

執筆者紹介

石塚 良次 本研究所客員研究員

ハ・ティ・ラン・フィ ベトナム社会科学院・東北アジア研究所

馬場 純子 本学人間科学部教授

〈編集後記〉

『社研月報』3月号ができました。本号は所員と客員研究員による3つの論稿が収録されています。ひとつは、石塚良次客員研究員の「資本とは何か—トマ・ピケティ『21世紀の資本』を読む—」、次にベトナム社会科学院東北アジア研究所研究員ハ・ティ・ラン・フィ女史の「日本のマンガがベトナムの青少年の成長に与える影響」、そして馬場純子所員の「日本の高齢化と高齢者の暮らし」。

石塚氏の論考は、本年2月16日に行われた同名の社研定例研究会に用意された原稿をもとにしたもので、編集の方からの急ぎの要請に迅速に応じていただいて、ここに掲載できるようになった。研究会の参加者は14名で、経済学を専門としない出席者も多かった。ピケティへの関心の度合いが見て取れた。内容については、本号に掲載されている「定例研究会報告」をご覧ください。研究会の後、石塚氏の方から、アクチュアルなテーマを設定した肩のこらない座談会的な研究会をもっと持ったらどうかとの提案をいただいた。ここ数年、研究会の回数を1年で12回程度に抑制してきたが、今後、氏の提案を検討したい。

フィ女史の論稿は、彼女が2014年前半9ヶ月間の専修大学留学滞在中に、社研定例研究会で行なった報告をもとにしたもの。日本のマンガ(例えば「ドラえもん」)がベトナムに受容されてきた過程、このマンガ文化がこれからベトナム社会にどう受け入れられていくのか、について論じている。この論稿については、嶋根克己所員によって事前に読んでいただいた。

馬場純子所員の論考は、2013年9月にわが社研がベトナム社会科学院と共催し、ハノイで行なった共同シンポジウムの報告を加筆・修正してできたものである。2013年のシンポジウムへの参加は、社研としては夏季実態調査としてハノイに行き、その主要な行程として組み込んだものだった。その後、いつものように調査報告を月報で編み(『社研月報』606・607号(2013年12月・2014年1月)合併号)、馬場所員はここでは「高齢者ケアの現場—ティエンドウック高齢者ケアセンターをたずねて—」と題する報告を上掲されている。そこで、あらためて本号に、上記シンポジウムの報告をもとにした論考を出してもらった次第である。

本号は、その意味で多彩なものとなった。ぜひご覧いただきたい。

S.M.

2015年3月20日発行

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 村上俊介

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
